

氏 名	有 木 純 善 あり き すみ よし
学 位 の 種 類	農 学 博 士
学 位 記 番 号	論 農 博 第 507 号
学位授与の日付	昭 和 49 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	木頭林業の展開構造に関する研究
論文調査委員	(主 査) 教 授 半 田 良 一 教 授 三 橋 時 雄 教 授 四 手 井 綱 英

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、地主＝商人資本の優越のもとに社会経済構造が形成された林業地の典型として、徳島県木頭林業地帯をとりあげ、かかる構造の形成展開過程を実証的に究明整理したものである。

論文は2編から成る。第一編は、近世における木頭の林野制度・村落構造および農耕技術の展開を究明する。えられた知見は次の通りである。

1. 徳島藩では、ほぼ元禄期までに藩の支配力が滲透し、御林・定請山・野山・稼山などの管理区分が整った。ところで木頭では農民支配地たる野山や稼山は少なく、御林が広大な面積を占めた。ただし御林の中には、一定期間を限って切替畑の設定を許す「伐畑御林」が、個人請および村請の形で広く存在し、後者は村支配の定請山と並んで農民の共同利用地の大宗をなした。

2. もっとも村落内部では、「一家」層と「小家・名子」層との間で林野利用の資格に顕著な差異があり、近世入会的林野利用の内実が具わっていたといえるかどうか、疑問が多い。著者は、主に折宇村（現在木頭村折宇）の史料を用いて寛永から文化に至る階層構成の推移を検討したが、それによると、中世的従属農民の自立化の方向が一貫してはいるが、文化期においてもなお不徹底である。この点は、県内の吉野川下流平場農村の場合に「一家」・「小家」の差が形骸化して近世的村落構造を確認しうると比べると、対蹠的である。

3. 木頭では焼畑耕作の農法が主体をなし、従って近世を通じて本田畑のように生産力が発展しなかった。このことは、村落構造にまつわる中世的性格の残存を許した重要な要因である。

総じて、近世の木頭山村にあっては、林業の商品生産を展開させるような内発的基盤が稀薄だった、といえる。

第二編は、明治期における山元伐出資本および那賀川下流大手木材商人資本の展開過程を論述する。木材商品化の進展にさいし、明治前期にはまず、旧村落支配者の系譜をひく上層農民が素材業者として自立し、中下層農民を労働者として編成し、流過程をも支配した。けれども明治後期になると、那賀川下流

域の商人が集荷独占的立地条件を背景として優位を占め、彼等は山元素材資本を駆逐しまたは従属させて、伐出流通を全面的に支配するに至る。かかる明治期の展開については既往の研究も存するが、この論文では、代表的な山元伐出資本および那賀川下流木材商人の家史の分析により、その過程を具体的に検証した。

論文審査の結果の要旨

林業ないし山村経済の資本主義的發展を法則的に解明することは、林業経済研究の中心課題であるが、その究明のためには、各林業地帯の個々の史実を少数の類型に整序し論理化することが必要と思われる。この論文は、如上の問題意識に発して、地主＝商人資本優越型林業地帯の典型として木頭林業地帯をとりあげ、豊富な一次資料を駆使して近世から明治期に至る村落構造・林野制度および林業生産構造を実証的に探究することにより、この類型の史的発展過程の特質を解明したものである。

さてかかる林業類型を形成させた要因としてとくに重要なのは、近世における村落内部の生産様式と、資本主義化の過程における木材市場構造とであろう。著者は、第一編の近世史では前者、第二編の近代史では後者、に力点をおいて考察するが、とりわけ第一編の研究成果は、次の諸点においてこの分野の研究を大きく前進させた、といえる。

(ア) 木頭山村の村落構造の近世を通じての変容過程を実証することにより、従属農民の自立が不十分にしか進行せず、近世入会が未確立のまま終わったことを見出した。17世紀末には小農民が一般に独立し、林野に対しては入会管理の形態が定着した、というのが従来の定説だが、これに対して著者は、近世入会形成の濃淡に顕著な地域差が存すること、を強調している。

(イ) 藩政下の林野制度に関して、従来あまり注目されなかった「伐畑御林」が、山間地帯では最も重要な農民の利用対象だったこと、を明らかにした。

(ウ) 近世入会の未確立に照応する生産力構造として焼畑農法に注目し、その実態について追求した。その結果、近代の商品生産の担い手への自己形成を可能ならしめるような封建的小農民の旺盛な浮揚力が、焼畑農法のもとでは育ちえなかった、という結論をえた。

第二編近代史についても、旧来の研究成果を豊富な新史料によって検証し補強した功績を、評価したい。

本論文は、木頭林業地帯を研究対象とする精緻な実証的研究として価値が高いだけでなく、地主＝商人資本優越型の林業類型の基本的性格を明確化することに成功している。その論証過程と結論とは、今後の林業史研究に寄与するところがきわめて大きい。

よって、本論文は農学博士の学位論文として価値あるものと認める。